

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20310145

研究課題名（和文）ASEAN 新規加盟国の「中進国」ベトナムと地域統合—日越関係を視野に入れて

研究課題名（英文）Regional Integration and the role of Vietnam as a<middle power>among ASEAN new member countries

研究代表者

古田元夫（FURUTA MOTOO）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：50114632

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ベトナムをはじめとする ASEAN 新規加盟国の地域統合の動態を、東西回廊など、これら諸国を結ぶ自動車道路を実際に走行して観察しつつ、ベトナムのダナン、バンメトート、ラオスのビエンチャンおよび東京でワークショップを開催して、現地の行政担当者や研究者と意見を交換した。こうした取り組みを通じて、ベトナムの東南アジア研究所と研究者と、この地域統合の中でベトナムが果たしている役割、それと日本との関係について意見を交換し、その成果をベトナムと日本で報告書にまとめて刊行した。

研究成果の概要（英文）：

In this research, we observed dynamics of the regional integration among ASEAN new member countries, especially in Vietnam through the survey of roads that connect these countries like “East-West Economic Corridor” and exchanged opinions with local scholars and local officials at several workshops in Da Nang and Buon Me Thout(Vietnam), Vientiane (Laos) and Tokyo(Japan). Through these activities mentioned above, we discussed the role of Vietnam in the regional integration and the cooperative relationship between Vietnam and Japan about this subject with the scholars of the Institute for Southeast Asian Studies in Vietnam and we published the results of this discussion as a working paper both in Japan and Vietnam.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2009	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2010	2,800,000	840,000	3,640,000
総計	11,600,000	3,480,000	15,080,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：ASEAN CLMV (ASEAN 新規加盟国) ベトナム 地域統合 大メコン圏 東西回廊 発展の三角地帯 日本の役割

1. 研究開始当初の背景

東アジア共同体の形成を展望した際に、ASEAN の果たす役割はきわめて重要だが、東南アジア 10 カ国を包摂した ASEAN は、その内部に旧加盟国と新規加盟国 (CLMV 諸国) の格差 (ASEAN ディバイド) という問題を抱えている。この ASEAN 内部の格差は正に大きな寄与を期待されている大メコン圏 (GMS) 協力は、近年に至り具体的に実を結びつつある。21 世紀に入って順調な経済成長をとげているベトナムは、引き続き自らが ASEAN 旧加盟国や中国などへキャッチアップという課題をもつ後進国として、CLMV の他国と利益を共にする面と、旧フランス領インドシナの構成員だったラオス・カンボジアに今なお強い安全保障上の関心をもつとともに、近年の自らの経済成長を背景に CLMV 協力により積極的なリーダーシップを発揮しようとしている、いわば「中進国」としての側面をもっている。学術研究の分野でも、ASEAN 内部の格差は正に日本が大きな役割を果たすべきであることが指摘されているが、日本とベトナムの今後の関係には、こうしたベトナムの「中進国」という面がより積極的に位置づけられる必要があるであろうということが、本研究の基本的な問題意識となっている。

2. 研究の目的

本研究は、ベトナムを ASEAN 新規加盟国 (カンボジア・ラオス・ミャンマー・ベトナムの 4 カ国、国名の頭文字をとって CLMV 諸国と呼ばれる) の中で能動的な役割を果たす「中進国」と位置付けつつ、現在の東アジアおよび ASEAN の地域統合という枠組みの中でのベトナムの役割を、ベトナム自身および周辺諸国がどのように見ているのかを研究し、そこで日越関係の建設的なあり方を検討することを意図している。

2. 研究の方法

本研究は、主要な研究方法として、各地で地元の研究者・政府関係者・財界人などを招聘しての小規模なワークショップの開催を蓄積していくことを重視した。また、文献資料の収集・解析の面では、ベトナム社会科学院傘下の地域研究機関 (東南アジア研究所、中国研究所・東北アジア研究所) の協力を得て、これら三研究所の紀要を含むベトナムの東南アジア、中国、日本に関する研究書、研究論文の網羅的なリストを作成し、その主要な動向を解析することにより、ベトナムにおける地域観の多様化・多層化の実情を解明した。

4. 研究成果

- (1) CLV 諸国では、21 世紀に入って急速な経済発展が持続する一方で、中国の急速な進出とプレゼンスの顕在化、それに対応する形での日本や米国の新しい関与などが進み、大きく状況が変化している。ワークショップや調査は、このような状況を、ベトナムをはじめとする現地の研究者や行政担当者がどのように認識しているのかを把握する上で、きわめて有効であった。ベトナム外交は、こうした状況の中で、ベトナムや周辺諸国における大国の影響力をバランスさせつつ、最大の利益を引き出そうとしているが、これは、「等距離外交」という意味ではなく、ベトナムの東南アジア研究所が日本との関係を研究課題に選んだことに示されているように、日本がこの地域でより戦略的な役割を発揮してほしいという強い期待が表明され、つっこんだ意見交換を行うことができた。
- (2) ASEAN は共同体としての発展を志向して存在感を発揮している一方、先行加盟国と CLMV の後発加盟国の格差、ASEAN 内外での脱「ASEAN 依存」現象 (山影進) など、試練にも直面している。ASEAN の「模範的加盟国」たらしめているベトナムの研究者とは、ASEAN の現状と展望に関する有益な意見交換を行うことができた。
- (3) ベトナムの研究者と、こうした ASEAN の現状と将来の展望について、率直な意見交換が行えた。
- (4) ベトナムを、地域統合において積極的な役割を果たす「中進国」ととらえたところに本プロジェクトの特徴があるが、これに対しては、何回かの意見交換を経て、ベトナム側の代表のレ・ボ・リン教授から、「ベトナムは必ずしも CLMV グループの『リーダー』の役割を果たさなければならないわけでもないし、またそうした役割を果たすのは困難でもあるが、CLMV、ASEAN、東南アジア外の各大国が、メコン地域や ASEAN の問題で常に考慮せざるをえない重要な国としての位置を確立する必要がある。換言するならばベトナムは、メコン地域の発展協力と CLMV と日本の関係において『牽引車』となるべきである」という回答を得ることができた。これは、ベトナムの地

域的役割の「自画像」として、傾聴に値する見解であろう。

- (5) 東西回廊をはじめ、いくつかの地域統合で重要な役割を期待されている道路を走行した。これらの自動車道路は、10年前と比べると格段に整備され、平均時速50~60キロ程度での走行が可能になっている。東西回廊では2009年6月に一定の範囲でベトナム、ラオス、タイのトラックの相互乗り入れが可能になったが、まだベトナムからタイへ、タイからベトナムへの、コンテナ車による大規模な物流が進む段階には達しておらず、むしろ現段階では、ベトナム中部の新鮮な海産物がラオスのサバナケットで入手できるようになっているなど、生活道路としての役割のほうが目立つ。また航空路や自動車道路の整備で、観光の分野ではGMS域内の相互交流が急速に拡大しており、実走調査では、こうした急速な変化の一端を把握することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- 1) 山影進「アジア地域制度における脱「ASEAN依存」の進行」『国際社会科学』61, 2011年、査読なし。
- 2) 古田元夫「ベトナム共産党の綱領改定案をめぐって」『アジア・アフリカ研究』50(4)、2010年、pp32-41、査読なし。
- 3) Shiraishi, Masaya “Japan Toward the Indochina Sub-Region” Journal of Asia-Pacific Studies (早稲田大学), 13, 2009, pp13-36, 査読なし。
- 4) Yasunobu Sato “How to deal with corruption in transitional and developing economies? A Vietnamese Case Study” Journal of Financial Crime, 16-3, 2009, pp220-228, 査読あり。
- 5) 山影進「ASEANファクターをどう捉えるか」『社会科学研究(東京大学社会科学研究所紀要)』61-1、2009年、pp5-14頁、査読あり。
- 6) 白石昌也「拡大ASEANとインドシナ諸国」『国際問題』576、2008年、pp37-47、査読なし。
- 7) FURUTA, Motoo “53 Năm Hoạt Động của Hội Hữu u Nghị Nhật Việt (ベトナム語)” Hữu u Nghị, 49, 2008, pp36-38, 査読なし。
- 8) 山影進「ASEANの変容—東南アジア友好協力条約の役割変化からみる」『国際問題』576、2008年、pp1-12、査読なし。

[学会発表] (計2件)

- 1) 池本幸生 “Poverty, Inequality and Health” メコンインスティテュートとの共催シンポジウム “Impacts of Economic Integration on Upland Farming and Ethnic Minorities in the Greater Mekong Sub-region” 2009/11/27, コンケイ (タイ)
- 2) 古田元夫、山影進 「シンポジウム「世界の中の東南アジア」趣旨説明(古田)、地域主義の湧き源泉としての東南アジア」、『東南アジア学会』、2008年11月30日、東京大学教養学部

[図書] (計3件)

- 1) Yasunobu Sato, et al. ‘New Perspectives on Human Security’ “The UN Global Compact as a catalyst for human security: proposal from Japan for CPR (corporate peace responsibility) in Malcolm Meintosh, et al (eds.)”, 2010, Greenleaf Publishing, pp.124-138/288.
- 2) 末廣昭、岩波新書、『タイ 中進国の模索』2009年、247頁。
- 3) 田中明彦、日本経済新聞出版社『ポスト・クライシスの世界』2009年、238頁。

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計◇件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者

- ・古田元夫 (FURUTA MOTOO)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：501146321

(2) 研究分担者

- ・山影進 (YAMAKAGE SUSUMU)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：10115959
- ・佐藤安信 (SATO YASUNOBU)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：90313981

(3) 連携研究者

- ・田中明彦
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：30163497
- ・末廣昭
東京大学・社会科学研究所・教授
研究者番号：60196681
- ・池本幸生
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：20222911
- ・白石昌也
早稲田大学・大学院アジア太平洋研究科
研究者番号：70127330
- ・栗原浩英
東京外国語大学・アジア/アフリカ研究所
研究者番号：30195557
- ・レ・ボ・リン (Le Bo Linh)
ベトナム社会科学院東南アジア研究所
- ・グエン・ズイ・ズン (Nguyen Duy Dung)
ベトナム社会科学院東南アジア研究所
- ・グエン・タイン・ヴァン (Nguyen Thanh Van)
ベトナム社会科学院東南アジア研究所
- ・伊藤未帆
東京大学・社会科学研究所・特別研究員